

「エッセイを書く」作品集

担当講師 中本 道代（詩人）

郷里にて

中本 道代

昨年十一月、両親の法事で六年ぶりに帰郷した。母の実家は、今は広島市に編入されたが山間部の小さな集落にあり、私はそこで生まれた。六年前に帰郷した時、猿や猪が出るようになったと言ひ、田畑のまわりが荒れ始めていたので驚いたのだが、今回はさらに、作物を作っても猪や猿に食べられてしまうからと、田畑の半ば以上は放棄され、荒野に帰ろうとする自然の力が勢いを増しているようだった。集落を歩いてみると、大きな家が空き家になっていたり、家があったところに何もなくなっていたりする。

かつてこの地にも、どの家にも働き盛りの親たちと子供たちがおり、活気ある生活が営まれていたのが夢のようだ。一軒あったお店もなく、バスも何時間かに一本になったと言う。日本中でいま、このような小さな集落が存続の危機にあるのだろうか。原因はいろいろあるだろうが、小さな農家を守ろうとしない農業政策がおおもとではないか。猿や猪が出てくるようになったのも、山中が開発で荒らされたせいかもしれない。冬に

向かおうとしている山村は、滅びと闘う厳しさと寂寥感を漂わせていた。

香りにはっとする

青木 理恵

丸ノ内線で池袋から茗荷谷へ向かう車内で、はっとした。隣に座った男性のまとつていた香りが、夫が使っていたものと同じだったのだ。届けるものがあり、夫が勤務していた会社に行くために乗った丸ノ内線のできごとだ。夫が亡くなつてからひと月半が過ぎた頃だった。

年齢は私と同じくらいだろうか。薄いピンク色のワイシャツにアイボリーのストラックスを合わせ、おしゃやかな雰囲気だ。少し迷つたが、思いきつて話しかけてみた。「あの、失礼ですが……。香り、ブルガリをお使いでいらつしやいますか」。彼は驚いた様子で、「いや、自分で選んでいないので、わからないんです」と答えた。私は「突然ごめんさい。夫と同じ香りを使つていて……。と、現在形とも過去形ともとれる表現で話した。「使つていた」という完全な過去形では、戸惑わせてしまうと思つたからだ。

この男性と同じで、夫も自分で選んだ香りではなかった。十年ほど前だろうか、「年齢が上がってきたせいかな、通勤電車の中の体臭が気になるんだよね。何かいいオーデコロンを買つてきてくれない？」と頼まれ、デパートであれこれ試して

私を買ってきた。爽やかで軽やかで、主張しすぎない香りが良いなと考えて選び、「ブルガリ・プールオム」に決め、クリスマスにプレゼントしたのだった。「これ、いいね」と気に入ってくれ、それから夫が同じものを買ってくるようになった。自分でもつけてもいいかなと思うくらい、私も気に入っていた。男性が申し訳なきように「匂い、気になりますか」と聞いた。「いいえ、とても素敵だと思います。私も大好きなんです」と答えると、安心したのか、少し笑ってくれた。

薄いピンクのワイシャツにアイボリーのストラックス。こんなコーディネートと夫と一緒に、ゴルフ場に行ったり、ウインドーショッピングをしたなあと思いついた。香りが、私を一瞬過去に連れていった。たった二駅間なのに、何年も時が流れた気がした。

柿

岡田 照子

ある晴れた日、買い物帰りに、いつもの実家のある県道の道ではなく裏道を通った。集落に沿って県道と並行して、まっすぐに伸びている。「あっ、ここは誰さんの家」「ここは○○さん家だ」と思いながら行く。私の子供の頃の家の面影は残っていない。建て替えられているので裏から見ると半分もわからない。でも、どの家にも柿の実がたわわに実っていた。橙色の柿の実はおひさまに照らされて輝いていた。

実家の横を通ると、書院の前の柿の木も実っていた。子どもの頃「青そ」と呼んでいた柿で、太い木が二本あった。少し細長い柿でお店では見かけない。柿が実る頃、二階の私の部屋に長い竿を用意しておいて、夜中にこっそりとって食べた記憶がある。買ったおやつ等なかなか食べられない時代だった。甥が「柿がなっているから、取りに来たら。誰もいなくても取って行つていいよ」と言ってくれていたが、やはり気が引けて後で来ようと通り過ぎてしまった。

その「青そ」の種を庭に蒔いた。五個ぐらい蒔いて、一番大きいのを一本残して置いた。今年で四年になるが、大きくなりすぎたので、枝を一本切った。てっぺんに小さな柿の実がなっていた。「青そ」とは似ても似つかない、丸い小さな柿だった。食卓の花瓶に入れて飾って、小さな実と葉脈から紅葉している柿の葉を、飽きずに眺めている。

家族の戦争

岡田 照子

遠い日の記憶の中に、暑い夏の日の事が浮かんでくる。母の実家に行った時、庭を歩いてくるやせ細った男の人を見かけた。「誰？」と私は母に尋ねた。

「さぶあんちゃん」と母は答えた。

さぶあんちゃんとは、母の弟で祖父の弟の所に養子に行つた人なので、私も滅多に逢つた事がない。戦争で南方の方に行つ

ていて、やせ細って帰って来たそう。大叔父たちも亡くなり一人では困るだろうと、足の悪かった従姉と結婚したのだ。昭和二十三年に男の子が生まれたが、それから一年位で亡くなった。やはり、戦地での栄養不良のせいか、帰って来て何年も立たないうちに亡くなってしまった。母と母の実家近くのお寺に施餓鬼に行った記憶がある。施餓鬼とは新しい仏さまの出家家が、八月の十六日ごろお寺に集まって供養をするのだ。大勢の人が集まっているのと屋台がでていたので、今日は何かのお祭りだろうと思ってみていたのだが、ずっと後になつてから、あれは「さぶあんちゃんの施餓鬼だった」と気付いた。従姉は小さな子を抱えて、東京で苦勞して育てていたが、縁あって再婚して昨年の九月に亡くなった。関東大震災の三日前に生まれ、九十歳だった。息子に看取られ、安らかな顔をしていた。

従兄もやはり南方に戦争に行ったという。椰子の木に登って椰子の実を取った話をしてくれた。従兄の母である義叔母はあと何日かで百歳と言う時に亡くなったが、従兄は六十歳少し過ぎで亡くなってしまった。やはり戦地での栄養不足のせいかもしれない。孫の顔を見られたのは良かったと思う。

友達は、樺太でお父さんが抑留され、お母さんと弟と三人で、両親の郷里に引き揚げてきた。何年かの後に「お父さんが亡くなった」と知らされ、お墓を建てたと言う。幼子を二人抱えたお母さんは、親戚の人たちに助けられて子供たちを育てた。そして、戦後五十年にもなろうと言う時に、福井県のお坊さんから「父親が生きていて子どもがいる。ロシアの真ん中辺の田舎に住んでいてつい最近亡くなった。亡くなる前に日本に子ども

がいることを打ち明けた」と言う事を聞かされたと言う。ロシアの娘さんが日本に来たので逢ったそう。お墓まで建てたのに……」と複雑な気持ちだったのではないかと思う。お母さんは九十歳以上でまだ元気だと言う。この小説のような話の彼女たちも、戦争の犠牲者だ。

戦争で一番苦勞するのは、何と言つても戦争に行った本人と家族だと思う。孫のクラブの先輩が今年防衛大の医学部に入ったと言う。集団的自衛権の行使で戦争に巻き込まれ、軍医として戦地に行くような事になつては、親の心配は計り知れない。深くは考えることもなく、お金が掛らなくて医者になれるからと選んだようだ。

軍事費にお金を使うなら、もつと若者たちの暮らしが安定する方向にお金を使ってほしい。安倍さんは子どもがいらないから、簡単に集団的自衛権の行使容認をするのだと思う。

世界のあちこちで紛争があり、子どもたちが傷ついている。いつの世も一般人と家族と幼い子が犠牲になる。早く平和になつてほしい。

魔女のルージュ

葉山 美玖

とある午後、私はスマートフォンをPHSに変更しようとして、いろんな携帯ショップを巡り歩いていた。こないだから付き合い始めた、ガラケー派の彼に影響されたものもある。が、た

ぶん彼の意見のせいだけではない。私は何だか、ツルツルの画面から外の世界に出て行きたくなくなったのだ。

毎日毎日、人の意見や生き方の切れ端をネットで眺めていても仕方がない。それよりも私は、リアルで本を読んだり人と話をしたくなっている。

しかしどこの店員さんの説明も、不親切でわかりづらかった。意地でもスマートフォンか、でなければタブレットを売りつけようと言う意地を感じた。実際今の世間で端末を手放すと、いろんな意味合いで不便なのだろう。皆、バーチャルの魔女の住む森を歩きながら泳ぎながら生きているのだろう。

疲れた家で帰ると、いつも魔女を舞台で演じていて、実際本物の魔女になりたい、と言うのが口ぐせの友だちから、誕生日祝いに手紙とルーージュが届いていた。口紅はビジュウがついた真紅だった。手持ちの橙色のグロスをそれに重ねたら、私に似合った年齢相応の色合いになった。

鏡で皺の出してきた自分の顔を見ながら、バーチャルで人を愛することは錯覚だと私は思った。

クリスマスの蜜柑

葉山 美玖

クリスマスというと、思い出すのは蜜柑の事だ。

私の母方の実家の曾祖父は、信州で初めてキリスト教を伝道

した人で、後には信濃毎日新聞の論説委員を務めていたと言う。祖父も、やはり牧師で長野の山の中の小さな小学校の校長をしていたが、飲酒癖がたたって早くに亡くなった。残された、後妻であるところの私の実の祖母が、教会附属の幼稚園の先生をしながら、子供四人を一生懸命に育て上げた。私の母はその兄弟姉妹の第三子である。

母は、地元の女学校から松本深志高校の女子第一期生となり、更にそこから苦学して東京大学へ進んだ。同期には、山田洋二監督が居たという。大学院は出たものの、その当時その学歴で、しかも専門が日本史では就職先が無かった。小さな出版社を転々としている内に、同級生であった父と出会った。結婚は、お互いに三十を超えての事だった。

母は、自分勝手な人だった。

実家の雰囲気もあって、母はクリスマスをきちんとするのが好きだった。ツリーを飾り、クリスマススイブには全員で賛美歌を歌い、丸焼きのローストチキンを食べた後、プレゼント交換をするのが常だった。(父は、内心この催しが嫌いであったようだが、ぼんやりした子供であった私は気づいていなかった。) 確か、私が四歳くらいのクリスマスの晩だったろうか。居間の、ストーブの前に蜜柑が積んであった。私は蜜柑が嫌いな、というよりも食べられない子どもであった。蜜柑だけではない、野菜もあまり好きでなかった。母は、いつも私に「ビタミンCが足りないと大きくなれない」と口を酸っぱくして言っていた。

しかしその晩。

私はたまたま、どこかよそのお家で頂いた蜜柑がおいしくて、ぺろりと食べた後だったのだ。母は儉約家であったから、家を出る蜜柑はあまり上等でなく美味しくはなかった。今思うと、そういう事情が裏にあった。

とにかく、私はいつもは食べない蜜柑をふと手に取って皮をむいて普通に食べた。その途端、母の口から出た言葉はこうだった。

「ずるいわ！　どこで蜜柑を食べることを覚えたの」

今にして思えば、母は自分の教育が上手く行つて欲しかったのだろう。自分がいくら勧めても食べない蜜柑を、娘である私が、どこかで食べられるようになったことが悔しかったのだろう。

それは可愛い女と言えばそうだし、自分の気持ちに正直な人であつたともいえる。

しかし、子供（と言うより幼児）であつた私は途方に暮れた。途方に暮れる以前にとても嫌な気持ちがあった。

あんなに食べる食べると言われていた蜜柑が食べられるようになったのに、母はそれで怒つた。怒るというより癩癩を起こした。私は混乱した。蜜柑を食べられるようになってはいけなかったのか。母の言うとおりにしたのに、どうして叱られたのか。

そこには、私の気持ちに対する配慮はどこにもなかった。

私はそれから蜜柑が嫌いになった。嫌いというよりも家で食べられなくなつた。母の前で蜜柑を食べることに罪悪感を感じた。母はそういう人であつた。

母は、いつも私を抱きしめる時、不安なこともがぬいぐるみを、もしくは恋人を、抱きしめるように縋り付くように抱きしめるのだつた。私はそれが大嫌いだった。……私はただ母の所有物、というより母の一部でしか無かつたのだつた。

今も、私は蜜柑を食べることが嫌いである。ひとつひとつ筋を取つて、皮を丁寧剥いている内に、母の刺々しい言葉を思い出すからである。

わが読書一冊三行題名だけがわが魂に及びぬ

細田 傳造

「われらの時代」、快楽の動作に耽りながら形而上学について考える、こういう流儀は Kenzaburo Oe から学んだ。おかげで「性的人間」になつた。本は、どの本も三行ぐらいつしか読まなかつたけれど、本のタイトルにはべとべとに淫された。「見るまえに跳べ」、「孤独な青年の休暇」はいつも見る前に跳んだ。落ちた。あつという自分の叫び声を聞いた。『墜落』。どぶ底で『悲の器』の欠片に涙を捨てた。いまからは『孤立無援の思想』でゆく。一九六六年、高橋和巳がかつこいい。その魅惑的な本は読まなかつたけれど、タイトルと遊んだ。履歴書の

信条欄にそう書いた。「散華」というロゴスのTシャツを着て歩いた。「わが解体」口を糊するために、そういう屋号の実業をした。色々な家屋解体現場で様々な捨て子物語を聞いた。『わが心は石にあらず』、わが心に涸れたはずの涙が湧いてきた。ある時は洪水になつて魂に及んだ。文学の責任は問わないけれど、たいていは中身が題名を凌げるか疑問だ。「わたしの本よさようなら!」、本の題名に毒がある大江健三郎の本はぜんぶ捨てた。内容はどの本も三行ずつしか読んでいないので知らない。高橋和巳の『憂鬱なる党派』は三十行ぐらいはちゃんと読んでみたいと思つている。

西洋の女

細田 傳造

西洋の女が好きだ。うつしみの白人女性と無縁なので(あたりまえだろう爺さん)映像の中の女優に酔い痴れる。この五月、わたしの五月はメリル・ストリープに欲情。滅びゆくアメリカ中西部(何が滅ぶというの?)、滅びゆく女。ラストシーン近く滅びの家を出てふらふらと八月のオレゴン州オーセイジ郡の草原を歩くヴァイオレットよ何処へ行こうとしたのか。滅びゆく妻よ母よ。願わくば永遠の家族をめさせ。女神よ。

実をいうとうつしみの英国女性をまじまじと見たことがあります。五月、まだわたしの宿屋は温突オンドルを焚く。熱い熱いファレンハイト百度、女は面妖な息を吐いて小獣の皮を鞣して仕立て

たらしい青い上着を脱いだ。初めて見る西洋の女の胸のふくらみ。馬小屋の方から牡馬ぼばの啜り泣きが聞こえてくる。静かに始まる欲情。人間の女に馬のくせしてからにまったくもつてけしからん。

翌朝、よく晴れたので女は断髪嶺タケノケリコに上りたいと言う。この国に入つてあまりに多くの気の荒い喧嘩する馬、女の人に野合を迫るたくさんさんの男たちを見たので仏門の静謐な人々に会いたいと言う。渓谷を流れる水を目に浴びたいと言う。

谷沿いの山道を行く。女はイギリス王立地理学会特別会員イザベラルーシーという寡婦であつた。

このレデイをおとなしい牝馬に乗せ前を行かせる。西洋流に。これは浅慮であつた。後を行く小生の乗つた牡馬め荒い息を吐いてイザベラルーシーの栗色の髪のがりと鼻先にゆらゆら揺れる雌の尻尾との交叉に不埒な尻をびくと震わせて暴れわたしは落ちた。落ちていきながら溪流クレマチスの花びらが急に開くのを見てわたしは氣を失つた。西記一八九四年五月のことでした。土曜日でした。江原道カンソンドで。わたしは宿屋の主人でした。一八九六年に私はこの国の踏査を終えて英国に帰つた。この旅行中の二年前随員の事故が私たちを落胆させた。現地雇いの宿屋の主人が馬から谷底に落ちて死んだ。名をリートブック。異国人による鉱産物の採取を氣に病む老人だった。私たちの調査の目的は他にあつた。この国へのインド綿の頒布にあつた。いまとなつてはそれほどでもない。朝鮮のうつくしい景観だけを報告書に書いた。

日が暮れなずみかけると「山々は急に開けて光がさした」。ㄥ

似顔絵

松浦 幸枝

居間の壁に、四年生の孫娘が描いた絵が額に入れて、よく見える位置に飾ってある。これは、お習字の半紙に墨と毛筆で描いた、おじいちゃん、おばあちゃん、自分と妹の四人の似顔絵である。昨年の私の誕生日のプレゼントとしてもらったものだ。皆の特徴がよく表現されていて、いくら見ても飽きない。見ていると楽しくなる。

この絵を描いた孫は、生まれてから九歳まで京都で両親と妹の四人で暮らしていた。父親の仕事の都合で、昨年四月に、私たち祖父母の住む東京の家に移ってきた。関西と関東では土地柄も気候も異なるし、小学校も転校しなければならぬ。すべて新しい環境になって、子供は子供なりに苦労するのではないかと、私達は心配していた。しかし、毎朝元気に登校していくし、近所にお友達もできて楽しそうに遊んでいる。身体は丈夫で心配することはなかった。月日が経つにつれて安心させられている。

プレゼントの似顔絵は、姉妹も口を開けて笑っている。おじいちゃんもおばあちゃんも笑った顔だ。おじいちゃんの薄い頭髪もおばあちゃんの口のまわりの皺もしつかりと描かれている。私達と一緒に生活するようになって楽しいと思ってくれていると勝手に解釈している。

行列

松浦 幸枝

池袋のデパートのお菓子売り場に、長い行列ができているのに出会った。並んで待つてまでどんなお菓子を買いたいのか知りたいたいと思った。しかし、売り場のケースが見えない程の人だかりで、その時は確かめられなかった。

私もかなりの物好きで、流行りの物にとびつく方であるが、行列に並ぶのには抵抗がある。戦後すぐは、行列に出会ったらとりあえず列に着いたそうさ。食べるもの着るものすべてが行列をしないと手に入らなかった時代だったと聞いている。子を持つ親たちは、特に都会では何事にも行列をする苦労をして戦後の混乱期を凌いできたのだ。

昭和三十年代の私達学生は、国鉄（当時）は学割で半額の交通費で旅行ができた。しかし席をとるためには、出発前何時間も行列して待たなければならなかった。今のように指定席をあらかじめ買っておけるなど、夢のようなことだった。

飽食の現代では、行列のできるラーメン屋とか、日替わり定食屋などが話題になる。特定の店のドーナツがブームで行列ができていると、テレビで放映されたりする。食べ物ばかりでなく、コンサートとかゲームソフト発売など数え上げるときりがないほど行列ができていいる。特に若者は行列を苦にしないようだ。

世の中平和なんだなあと思持ちがゆるむ。今時の若者たちは、昔の行列は今と違う意味があったなど知らないであろう。それ

はそれで時代の流れというものだろう。

多様な価値観がうずまく社会にあつて、保守的といえれば言葉は聞こえが良いが、感性が鈍感になり、めんどうくさいとか億劫だとか、年齢を重ねるにつれて怠惰になつている自分に気づく。

「みんなになるな ひとりになれ」という言葉が拙寺の掲示板に書かれている。絆、連帯、人の和が強調される昨今にあつて、どういうことを意味するのか考えている。私は、流行や他人の言葉に惑わされないように、ほんとうのことをしっかりと考えなければならぬ、ということではないかと思つた。

私が目撃したお菓子売りの行列で、皆が買つていたのはラスクだった。自分では買つたことはないが、おみやげにいただいて食べたことがある。このお菓子は私達が子供の時からあつて、そんなに珍しいものではない。好き嫌いは人によるのでなんととも言えないが、行列するという手間暇かけて手に入れるほどの物かは疑問だ。

幸せは自分の心が決める

吉沢 智子

しあわせは いつも じぶんの ところが きめる
自分自身と向き合い、自分の言葉を自らの書で伝えた、書家で詩人の相田みつを氏の作である。

私の母は「幸せにしてくれると言つたのに、幸せにしてくれなかつた」と父のことをことあるごとに私に言つていた。子ど

ものころからずっと母の愚痴を聴き続けていたけれど、あるとき、幸せつてだれかにしてもらうものじゃなくて、自分で感じるものなんじゃない？ という思いになつたが、口には出すことはできず、言葉を胸の中に飲み込んだ。

相田みつを氏の言葉に出合つたとき、かつて飲み込んだ思いと言葉に光が射し浮かび上がってきたように感じたのを思いだす。

被害者意識が強かつた母は、いつでもかわいそうな自分を表現していただろう。子どもだつた私は、かわいそうな母に安易に同情して、父のことを敵視してしまい心が凍えたようになっていた。

それから長い時間がかかつたが、凍えた心はいつでも光を求め、迷いながらも一歩づつ雪解けの春への道を歩んできたのだと思う。

「幸せはいつも自分の心が決める」と声に出して言つてみた。

新しい時代

吉沢 智子

昭和四十年代に小学生だつた私は、二十一世紀という時代に夢と希望を抱いていた。昭和三十九年にはオリンピックが開催され、私も近所の女の子たち何人かと前の家のテレビで、開会式の各国選手団の入場行進を誇らしい気持ちで観ていた。時は高度経済成長下で、インターチェンジのある高速道路や天を突

く高層のビルディングがどんどん建設され、自動車や電化製品の生産も急ピッチで進められていた。

そのころの子ども向けの学習雑誌や弟の漫画週刊誌には、透明なドームの中に都市を建設したり、ロケットで宇宙空間を旅したり、一人乗りの円盤で自由に空を飛んだりできる未来予想図がグラビアページに載っていた。テレビでもアメリカのハンナ・バーバラというアニメ制作会社の「宇宙家族」や、ディズニー番組のなかの未来の国はよく観ていて、そういうものの影響をたくさん受けた。

このままいけば二十一世紀には宇宙時代がやってきて、地球上では国境や民族の違いはあっても行きたいところへはどこでも行けて、世界中の人々が仲よくしていて戦争なんてものは一切やっていない、平和な星になるんじゃないかと単純に考えていた。

気がつけば二十一世紀になって十三年たつが、地球ではどこかしらで戦乱があり、温暖化による巨大台風や地震、津波、竜巻などの自然災害も頻発している。ここ何年かの夏は人の体温より高い四十度を超える猛暑だし、今年は関東でも二度も大雪が降るほどの寒く長い冬だったり、気候は年々厳しさを増してきてこのままいつたら一体どうなってしまうのだろうかという心配の方が先に立つ。

子ども時代のわくわくするような二十一世紀への夢や希望はどこへ行ってしまったのだろうか。昭和四十年代の子どもの目には、いいことばかりしか映っていなかったのだが、そのころに反戦運動や公害問題などのさまざまな現実、社会問題が明らか

になってきたのだった。

この三月十一日で東日本大震災から三年がたった。復興は遅々として進まず福島原発で被災された方々は故郷へ帰れるかどうかのめどもつかず、今後どうしていったらよいか、個人では考えたくても限界を超えていてどうにもならない苦しい毎日をおくつていられるのだろうか。それでも人間は生きていかなければならない。さまざまな問題を抱えながら、問題から目をそらさずにどうしたら解決の方へ向かえるのか、あくまでも問題解決の道を探ろうとするところに、新しい時代への道しるべがあると信じる。これが今の私の夢であり希望である。

九段下「昭和館」

吉田 緑

九段下、靖国神社からすぐ目の前に、「昭和館」がある。千代田区の運営で、昭和の暮らしや、特に戦争中の暮らしを展示している。私は昭和三十年代の生まれで、子どもの頃は高度成長期であった。戦争の影響を受けてはいないだろうと思うのが正しいだろう。しかし我が家は（決してうちだけではないだろうが）昭和が終わるところまでは、戦後だった。この九段下からすぐの牛込で戦前から戦中、戦後を暮らした。

私の父は長男だった。戦前の長男は今とは違う。戦前の教育を受けた男子は、長男である自覚をもって生きたのだろう。

祖父は、昭和二十六年まで捕虜で帰ってこなかった。C級戦

犯だったらしいが、戦犯で帰れなかったのか、捕虜で帰れなかったのか私にはわからない。ここ数年祖父のことを調べているが、正確なことを知っている親戚もいなくなった。古い写真を並べて、今まで聞いたことを思い出して繋げている程度なのだ。昭和十七年にマラッカに行っており、その時のマラッカの写真が大量にある。確か軍属で行っていたと聞いている。

その間、家族の生活は父にのしかかった。父は大正十五年生まれだ。結核を患ったので徴兵されていない。身体に問題があっても、長男として一家を支えなければならなかった。弟妹（私の叔父、叔母）は、小学校、中学校に行っていた。

現在、東京大空襲は三月十日のことばかり報道しているが、山の手地区は、そのあと五月二十日に大きな空襲があったそうだ。牛込だけでなく山の手一帯が焼け、家の角の手前まで火が来てもう駄目だという時に風向きが変わって、一角だけ焼け残ったそうだ。

戦後、新宿、淀橋の先まで見えたという。上野の山まで見渡せたそうだ。食べ物もなく、市ヶ谷の土手に草を摘みに行つて茹でて食べたなら、下痢をした話は、何度となく聞いた。奇跡的に焼け残った家で間貸しをしながら、祖母と父の収入で一家を支えたのだろう。

祖父が無事に帰ってきて、弟妹が就職し、嫁ぎ、長男の役目が終わった。昭和三十三年に結婚した。そして私が生まれた。

私の記憶では、我が家はずっと戦後だった気がする。つましく、つましく生きていた。「もはや戦後ではない」という言葉もあったし、よその家が高度成長に沸いて「レジャーだ、

マイカーだ」と言う時も、最後まで抵抗し、車を買ったのは昭和四十六年だった。

父と母は、新家庭を別の家で作ったわけではない。焼け残った戦前からの家と家財道具のままだった。私が子どもの時、うちはよそと違うと思っていた。よその家は、戦後建てられた家か、高度成長期に新家庭を持つているので、古臭い家具や道具がなかった。うちは、時代遅れだろうが使えるものは使うという考えなので、古いものがたくさんあった。

ブリキのバケツ、金タライ、古い足踏みミシン、アイロン、金物の鍋や、やかん、トイレも古かった。練炭や七輪も使っていた。小さい頃、友達が来ると恥ずかしかった。よその家は、花柄や綺麗な色の鍋や、食器があった。カバーのかかった椅子やテーブルといった洋風の家具があつて、羨ましかった。

昭和の終わりに父が亡くなり、その後、すぐ古い家を壊した。その時、古いものはすべてそのまま家と共にゴミとなった。

あれから二十年以上上った。私もいい歳になった。九段下「昭和館」に行ったら「あら、あれ家にあつたわ」と思う懐かしい家財道具が展示してあつた。私が嫌って無神経に処分した、昭和の匂いのするものがあつた。

祖父や父が何度も聞かせてくれた関東大震災の日のことや、戦争に突入した時の事情を、「陸軍の暴走だ」とずっと昔から言っていたことなど、生き字引が近くにいなから、聞いていなかった。大事な昭和の遺物も古臭いと処分してしまった、若かった自分を後悔しているためか、ただ懐かしくて引き付けられるのか、私は「昭和館」が好きだ。

昭和の終わりから平成にかけてのバブル景気を境目に、マイナーな話題が世の中から消えた。戦争中と戦後の話をする親戚もいなくなつたし、古い家も無くなつた。

「昭和館」に来ると、色々なことを思い出す。私は痛い思いがないから懐かしいだけだが、実際戦争の経験のある人にとっては、思い出したくないことばかりかもしれない。

常設の「昭和の暮らし」の展示のほかに企画展もある。残念なことは、いつも空いていることだ。土曜と日曜の来場者が主で、平日は学校単位の研修や見学、修学旅行の見学が多いそうだ。現役の学校教師は、戦後の生まれのはずだ。戦争体験がなければ説明は難しいだろう。私は貴重な資料館だと考えるし、懐かしい我が家を思いだせる。折に触れ九段下に「昭和館」があることを話し、たくさんの方が見学して欲しいと願うのだ。

関の声

渡辺 正道

駅に向かって歩いていると突然、鶏の鳴き声が聞こえた。

「コケッコッコー」と威勢のいい声が三度も空に向かって響いた。雄鶏の声を聴いたのは何年振りだろう。思えば小学校の頃、鶏小屋の掃除を任されていた時以来である。まだ街中にも鶏を飼っている家があることを知って嬉しくなつた。

今のマンションに転居して一年半になる。老妻と二人きりの生活となつた今、身体を鍛えることも考慮して駅から少し離れ

たところに決めた。周りには住宅が建て込んでいるが、菜園畑や花卉栽培のハウスがいまだ残っている。

入居したマンションには子供達も多く、敷地内で遊ぶ子供の甲高い声や姿を見ていると元氣そうで嬉しくなる。駅へ行くのに最初は自転車を利用していたが、運動にならないと思いつくことにした。歩いて行く時は車の少ない路地を歩いている。すると今まで気がつかなかったものに出会える機会も多くなり、偶然にも雄鶏の関の声を聴くことが出来た。

この頃は園児の声に文句を言う人がいると聞くが、雄鶏の鳴く声までうるさい等と言つて欲しくない。文句が出ると長閑なひとときが崩れそうで淋しい。都市化の波にさらされる武蔵野で出会つた一コマである。

至福の時間

渡辺 正道

時の流れは人に変化をもたらす。

若い頃は徹夜でテレビを見ても苦にならず、退職前後になると経営に関する番組だけを見てきた。そのころは自分のためのゆとりの時間は無く、あくせくした時の流れだけがあつた。朝六時には起床、七時半には通勤電車で揺られ、若者たちより一足先に出社。帰還は常に夜の帳が降りてからという日々であつた。

ところが六十六歳での定年の後は生活が一変する。六時に起

床するとゆつたりと一日が動き始め、自分の時間を持つことが出来るようになった。一日が終わると夜九時半過ぎには就寝する。経済動向も気にすることなく、新聞も一社に絞り購読し、他はネット契約にて四社を見ることで毎日をご過ごしている。

不思議なものでテレビを見なければ落ち着かなかったテレビ依存症は薄れ、見なくとも生活できる今が本当の人生と言える気がする。若かりし頃の金銭的な貪欲さもなくなつた。心にゆとりが出来たからかもしれないし、知らなかつた世界とのめぐり合いが変化をもたらしたのかもしれない。

最近、日々の中で私が一番至福を感じるのは朝の一時間である。

五時に目覚め、寢床の中で六十分、新聞や本を読んで過ごした後、カーテン越しに聞こえる風の変化を気にしながら起床する。カーテンを開け、さわやかな外気を室内に入れる。

その後は身支度を整え一人朝食をとる。連れ合いは相変わらず夜型で、この時間もまだ白河夜船である。誰もいない静けさの中で音量を小さくしてテレビを見る。

特に夏は、この時間にはすでに太陽が東の空に上り、東向き窓から燦々と差し込んでいて気持ちがいい。ベランダの下にある児童公園の樺の大木では、小鳥のさえずる声が澄んだ空気の中に響いている。じつと心を落ち着かせて聞くと、季節や日により小鳥の鳴き声は違う。数種の野鳥が飛来していることがわかる。

朝の六時四十五分、私の大切な時間が始まる。それは七時四十五分までの一時間である。

始まる前にトーストを好みみのカラカラのこげ茶色になるまで焼き、連れ合いが作っておいてくれたポテトサラダをたっぷり乗せて二枚準備する。珈琲はインスタントだがなるべく蜂蜜で甘みを取る。後は果物少々である。

テレビの画面ではクラシック音楽の番組が始まり、管弦楽団のオーケストラが現れた。見るとステージの中央に指揮者とチェリストが頭を垂れ、チャイコフスキーの曲が演奏され始めた。クラシックに疎い私はただ聞くのみである。演奏家は男性は黒のスーツがほとんどで、女性の衣裳はカラフルである。肌も露わな彼女たちが指揮者のタクトに意識を集中して真剣に弦を弾く姿は、音色と共にいいものだと思う。時にはテノールやアルトの歌手の歌声も聴くことが出来る。

トーストを食べながら管弦楽器の調べを聞いていると、何時の間にか次の番組へ移って行っている。

この時間になると、ベランダの下ではガチャガチャと音がする。ごみ収集小屋の音だ。今日は不燃物とガラス・ビンの回収日である。各家庭から出される恒例の音に合わせて番組は変わり、自然風景の純朴な画面になる。

題は「山里」である。この番組は私の心に沁みる番組で日本各地の山里を訪ねては、そこで暮らす人々と生き物たちの姿を伝えてくれる。収録放送である為に時期は少しずれるが、失われつつある山里の自然を捉えられ、画面に息づく野草や鳥、魚たちが生き生きと映し出されて嬉しくなる。

見失いそうな昆虫も大きく映し出してくれる。特に写真家の今森光彦氏の捉えた被写体にはうっとりする。今森光彦氏のこ

とは新宿で写真展を覗き、トークを聞いた時から好きになった。里山を愛し、崩壊することを嘆く氏のソフトな語り口と、再生への情熱、それを記録に残す仕事に敬服したものである。

この日は島根の三瓶山麓を訪れての放送であった。山の中腹はなだらかな草原が続ぎ、その牧草地を守る住民と放牧された牛、それらを取り巻く草花や昆虫などの共生の風景が映し出される。自然の営みと輪廻が感じられる映像である。若い頃、何度か島根を訪れたことがあった。ある年、地元の人と草原を訪れると、遠くに日本海が眺められ、背にはなだらかな三瓶山が日本海からの風を受けていた。

地元の人には下草を刈り、放牧する時には「山に牛をあずける」と昔から言い、「優しい自然との調和で山里が守られている」と言う。画面にはこの時期に咲く「おみなえし」や「オキナグサ」、それに蝶や昆虫が映し出されている。画面を説明するナレーターの声が風景とよく合っていて印象的であった。

珈琲が冷めても画面から目を離せない。

この番組の良さはその日その日によって「季節の言葉」を最後に教えてくれることである。この日の季節の言葉は「花野^{はなの}」であった。

「山里」の放送の後、少しだけ日本の伝統工芸の映像が流れ、その後「朝の連続テレビドラマ」が始まる。再放送ドラマと中島みゆきが主題歌を歌う現在進行中のドラマが続けて放送される。

二つとも十五分の短い時間であるが、私にとってはこの時間は生活の一部であり、「山里」では故郷を思い、「朝の連続ドラ

マ」の画面では戦後の復興状況が甦えつつくる。どちらも私らが今まで生きた証と重なる。

おだやかな時間の流れは朝日が昇るにつれて過ぎて行き、一日が始まる活気ある時間となる。マンションの近くでは子供たちの登校が始まり、櫟の木にいる小鳥たちのさえずりも活発となる。

好きな番組も終了し、肘掛椅子を反転すると連れ合いがいる。テレビのチャンネル権は連れ合いに引き継がれ、入れかわりに私は自分の部屋のパソコンに向かう。

わずか一時間の短い時間であるが、今はこの時間が私にとってこの上ない至福の時間となっている。

